

GEIBUN GALLERY

新生一般社団法人 芸文ギャラリー

富山大学芸術文化学部教授 後藤 敏伸

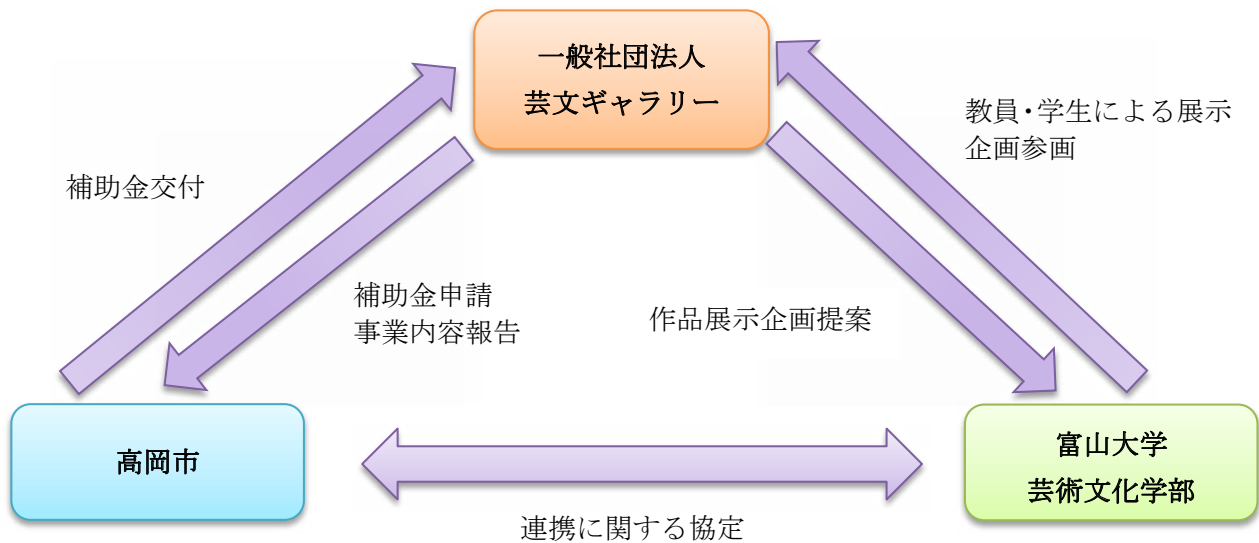
芸文ギャラリー開設5年目となる2012年に高岡市御旅屋通りへ高岡駅地下より移転し、富山大学芸術文化学部生の授業成果や制作活動の発表などの場として、地域創生、地場産業の活性化、アートやクラフトという文化創作的紹介を軸に、高岡の地に存在するあらゆる文化資源を発掘、更には発信することを目的として運営されてきた。

本年度2016年4月、新たな展開と明確な目的のもと、芸文ギャラリーの一般社団法人化がなされた。国立大学

法人としての富山大学が、一般社団法人化されたギャラリーの運用を行うことなど当初想像もできなかったことではあるが、学部、高岡市の関係者の尽力により可能となったことは喜ばしいことである。この法人化で、芸文ギャラリーは独立した経営が可能となり、大きな変革を生み出す。採算性のある企画や、ギャラリーグッズを商品として販売できるのである。その収益の運用も全て独立採算制的に可能となった。

下図がその組織運用体系である。

一般社団法人芸文ギャラリーの組織等について



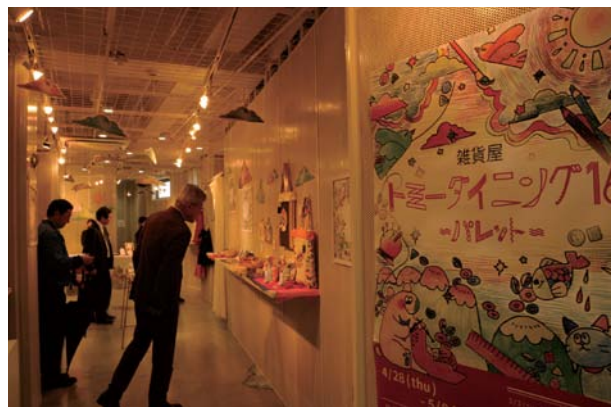
芸文ギャラリーに於いては、年間二十数件の企画展示が行われてきたが、その内訳は学部主催、ギャラリー主催、授業成果、学生貸出、一般貸出、高岡市との共催、企業との共催に分けられる。その使用申請の手順と様式、使用料、芸文ギャラリーのデザイン委託料等が法人化後に改定され、明示されることになる。現在芸文ギャラリー社員は、店長と経理担当の2名で運用され、学生の臨時雇用数名で成立している。芸術文化学部としては、芸文ギャラリーを有効活用するため専門委員会を組織し、学

部主催、学部共催、授業成果展示等の申請を受け付け、内容チェックを行っている。

新生芸文ギャラリーが芸術文化学部の広報的存在としても大きく飛躍すると同時に、高岡市のまち中にぎわい創出にさらなる貢献を生み、学生にとっては学内で経験することのできない刺激や新たな発見、出会いの場ともなっていくことを願ってやまない。様々な文化芸術の活動を通し、「創り手、つなぎ手、使い手」という三位一体の理想形を実体験として包括して行くものである。



2016年4月 一般社団法人 芸文ギャラリーのオープニング



新生芸文ギャラリーの第一回展示の様子



芸文プライズ



御旅屋宏輝展



芸文の0号展1



芸文の0号展2



燕三条展